

志を尊ぶ

武士道協会 理事
安岡正泰

山田方谷と橋本左内

幕末松山の貧乏藩といわれた板倉家の家老で儒学者でもあった山田方谷が今見直されています。方谷は財政改革を成し遂げ藩政を一新した人物です。その方谷が十四歳の時につきのような詩を作っています。

父今生我母育我。
天今覆吾地載吾。
身為男兒宜自思。
茶茶寧與草木枯。
慷慨難成濟世業。

蹉跎不奈陳駒驅。
幽愁倚柱独呻吟。
知我者言我念深。
流水不停人易老。
鬱鬱無緣啓胸襟。
生育覆載真罔極。
不識何時報此心。

父や我を生み、母や我を育つ。
天や吾を覆い、地や吾を載す。
身は男兒たり、宜しく自ら思うべし。
茶茶(ほんやり)、なんぞ草木とともに枯れんや。

慷慨(心が昂ぶる)、成しがたし濟世の業。
蹉跎(志を得ず)、いかんともなせじ陳駒(月日の経つのが早い)の駆けるを。
幽愁(深い憂いや思いに沈む)、柱によりて独り呻吟す。

で刑死した橋本左内は十五歳の時に『啓発録』という本を書いています。その中に五つの項目を挙げています。

- 第一 去稚心 幼稚な気持ち去れ
- 第二 振気 元気を出せ
- 第三 立志 志を立てよ
- 第四 勉学 学を勉めよ
- 第五 扱交友 交友を扱え

我を知る者は言う。我念深しと。
流水停まらず、人老い易し。
鬱鬱(気がふさがる)、縁(胸襟)を啓くなし。
生育覆載(天地)は、真に極まりなし。
識らず、何の時か此の心に報いん。

もう一人やはり幕末福井藩の藩士で安政の大獄



▲やすおか・まさやす

1931年、安岡正篤氏の次男として東京都に生まれる。'56年、早稲田大学第一法学部卒業。日本通運株式会社に入社し、取締役、常務などを歴任。'99年に同社を退職し、財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館の理事長に就任。著書に「為政三部書」に学ぶ―出処進退の人間学(致知出版)、「人間」としての生き方(PHP研究所)などがある。

さらに左内は最後に「性質粗直にして柔慢なる故、遂に進学の期なきように存じ、毎夜臥衾中に涕泗(涙)にむせぶ」と言っています。

大事なことは、十四、五歳で立派な詩や本を著したからということではなくて、若くして立志していたこと、純粹な情緒や熱烈な感動・感激を持っていたことです。読んでいて幕末の志士達はずばらしい精神の込められた人物であったことに頭の下がる思いです。こういう尊い志を持っていたか無いかで人間の価値は決まるといえます。



青年時代は人生の春

昨年一月、さまざまな立場から武士道を検証して日本人のあり方、生き方を考える「NPO法人 武士道協会」が発足しました。そして武士道十精神をとりあげ「武士道憲章」が定められました。その第一条に「武士道は志を尊ぶ」とあります。つまり「立志」です。

現在の日本は急速な変化の中にあり、精神的にも混乱した様相を深めています。

常識では考えられない事件が日常的に続発して安心・安全に生活できない毎日です。だからといってこの現象に私達は負けてしまうことはできません。私達は将来に向かって自分自身を反省して前向きに努力していかなければならないでしょう。とくに青年達の若々しい力が求められます。

論語に「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ」とありますが、青年時代は人生の春であり理想に向かって信念と情熱を持って身を立てる時です。

幕末の若き志士達に学ぶ

幕末明治の若き志士達の言動を振りかえってみましょう。当時の日本は一步誤れば国が亡びるかも知れない存亡の時代でした。

「正しきによりて亡ぼる国あらば亡ぶともよし必ず亡びず」という明治先覚者の歌がありますが、若い志士達の情熱が明治新国家を作りあげたのだと思います。

今、日本人にはこういう志と情熱が失せてしまったのではないでしょうか。何か日常の出来事以外に物を感じなくなつた。精神的に不健康になつて感激性が無くなつてしまつたといえます。

幕末明治の若き志士達は、日本の国を新しくしようとする理想に生きた人達です。あらゆる面において生命力が旺盛で感激性を持った人達でした。私達は先人の人物像に学び、その志を尊び武士道精神を根源とした一燈照隅万燈照国行を励むことが大事でしょう。とくにこれから日本を担う青年達の立志を願っています。